グローカル

創刊号

私にできること ―― 体験的国際交流論 ――

フェリス女学院大学大学院国際交流研究科

『グローカル』創刊号に向けて

2001年の4月、フェリス女学院大学国際交流学部に大学院国際交流研究科が開設されました。これで国際交流学部は名実ともに教育と研究を両立させる本格的な学術センターになりました。

本格的な学術センターと言いましたが、しかし、私たちは従来からある大学院の性格をそのまま踏襲しようとしたのではありません。グローバリゼーションの時代は、ヨーロッパに始まる世界の近代化がいよいよその完成にまで達したことを物語っていると同時に、近代世界の進化がその頂点に達して大きな曲がり角に直面したことをもしめしています。科学技術の発展を信じ、その行く先に解放の領域を夢見た近代は、さまざまな制約にぶつかって、いまでは戸惑いのなかで揺れ動いています。昨年9月11日の事件とそれに続くハイテク化された「戦争」(?)は、双方ともに、科学技術の先端が科学技術によって支えられた現代文明の破壊に向かっているのではないかという疑念を、言い換えれば科学技術文明の自己破壊衝動への疑念を、かき立てることとなりました。はたして人類の将来はどうなるのかという問いが避けられなくなっています。

進化と発展をたどってきたとされる近代について、私たちはその歴史を振り返り、そこに問題は無かったかどうかをあらためて吟味しなければなりません。また、未来の可能性について、これまで当然のことと信じてきた前提を再検討しなければなりません。近代以来の社会科学そのものも、再検討の対象から外す訳にはいきません。

私たちは、近代の社会科学が文化や宗教を対象とする人文科学から自立して専門領域の細分化に進んできたことについて、疑問をもたずにはいられません。また、科学技術の発展がマイナスのモーメントを避け難く内包しており、数々の環境破壊を生み出しているという事実を目にして、社会科学と自然科学の分離を押し進めてきた近代の学問を、根本から問いただされなければならないと考えています。専門性の高度化が科学の発展を進めてきたことは間違いありませんが、専門性の高度化が過剰なまでに専門家の地位を高め、彼らに独善的支配力を与えてしまったこと、それによって社会から全体を見る目が失われてしまったことも事実なのです。現代ドイツの社会学をリードする研究者として知られるウルリヒ・ベックは科学技術の独善を批判し、『危険社会』(原文、1986年。邦訳、1998年、法政大学出版局)の到来を警告しています。彼は科学技術の自立性をこのまま認めるべきではないとし、科学技術も専門外の人々が発する批判(「新しい社会運動」として現れる批判)に耳を傾けなければならないと主張しています。ベックは「自己再帰性」(self-

reflexivity)のもつ重要性をしきりと論じていますが、その主張の中心には、現代の科学技術が社会のなかに還元され、そこにおける批判のまえに透明化されなければならないという判断があるのです。

いま、大学について、一方では、企業との結びつきを強めて先端技術開発のセンターにならなければいけないという声が高まっています。現代の大学が、これまで理想とされてきた「象牙の塔」のままでいられなくなったことは確かでしょう。しかし、大学は企業の研究所になればよいのだといわんばかりの論調に対しては、それは違うとはっきり主張しなければなりません。私たちは、専門分化の道をひたすら走りつづけてきた近代の学問に疑問符を付け、社会科学を日常生活のただなかに連れ戻すという新たな道を開拓してゆかなければなりません。私たちの大学院が夜間の講座を開き、社会人として職業生活を送っている人達を積極的に受け入れることとしたのは、以上のような意味で大学院の性格を大幅に組み直す必要があると考えたからに他なりません。

私たちの大学院は、発足の一年目に青年海外協力隊での活動経験をもつ三人の院生を迎えることができました。この創刊号は、これらの三人の社会人院生による講演からなる特集号としてスタートすることとなりましたが、このことは、グローバリゼーションの時代にふさわしい大学院に関する以上のような私たちの構想が、まさしく、意味ある試みであったことを証明する成果だと言えるでしょう。大学を卒業してストレートに院生となった学生にとっても、社会人院生との交流は大きな励みであり、刺激になっています。それればかりではなく、実社会の経験に乏しい教員スタッフにとっても、社会人院生との交流は貴重な情報源であり、発想の源となっています。

「私にできること ── 体験的国際交流論 ──」を掲げた講演会は、学部と大学院の学生が拠出した基金によって運営されている国際交流学会によって主催されました。当日は沢山の学生が出席してくれました。また、多くの教員スタッフも参加してくれました。この貴重な催しを企画してくださった学科主任の大野英二郎教授に、さらに司会役として当日の会を運営してくれた院生・学生の皆さんに、心から御礼を申し上げます。

2002年1月21日

大学院国際交流研究科長
山之内　靖

目　　次

第一部　青年海外協力隊に参加して …… 1

第二部　異文化世界での体験 …… 10

第一節　メキシコ学校での日本語教育 …… 10

第二節　スラベシ島でのコミュニティー開発援助 …… 19

第三節　スリランカとエジプトでの教育広報普及活動 …… 30

第三部　地域社会から学んだこと …… 43

第四部　質疑応答 …… 46

国際交流学会講演会

私にできること　―― 体験的国際交流論 ――

2001年5月31日（木）

川　添　慶一郎

青年海外協力隊のインドネシアにおける、村落開発プロジェクトに参加

林　　直　里

ＪＩＣＡ日系社会青年ボランティアとしてメキシコで日本語を教える

平　井　　朗

青年海外協力隊及びＪＩＣＡから、アジア、アフリカの各地でＩＥＣ（Information, Education and Communication）の専門家として各種プロジェクトに参加

第一部　青年海外協力隊に参加して

〈司会〉

これから国際交流学部国際交流学会講演会を始めます。

今日講演していただく方の紹介をいたします。

三人の方はいずれも今年新しく設立された、フェリス女学院大学大学院国際交流研究科に入学された方です。三人の方は国際協力事業の体験を今までされてきた方で、まず一人めは林直里さんです。林さんは日系社会青年ボランティアとしてメキシコで日本語を教えてこられました。

二人目は川添慶一郎さんです。川添さんは青年海外協力隊のインドネシアにおける村落

開発プロジェクトに参加してこられました。

三人目は平井朗さんです。平井さんは青年海外協力隊及びＪＩＣＡからアジア、アフリカの各地でＩＥＣの専門家として各種プロジェクトに参加してこられました。

この講演会の予定としてはまず平井さんの方からＪＩＣＡの概要についてご説明いただきます。その後それぞれの方に自己紹介、活動の内容、活動等の中で困ったこと、発見したことなどの問題点についてアドバイスをいただいて、最後に質疑応答の時間がありますので皆さん積極的に参加して下さい。

では、先ず今日の講演の中心になるＪＩＣＡについてですが、講演会の前に皆さんにアンケートを取らせていただいたんですが、その結果ＪＩＣＡとは何かという質問をたくさんいただいたので、先ず最初にＪＩＣＡの概要について平井さんから説明していただきたいと思います。それでは平井さんお願いします。

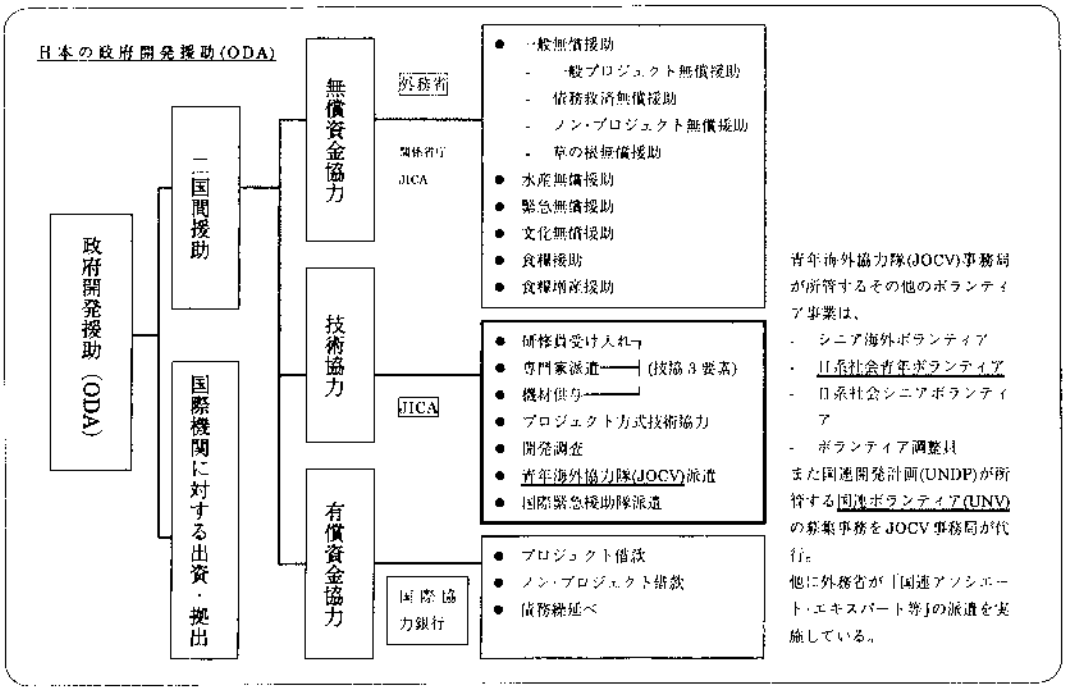
〈平井〉

今ご紹介いただいた平井です。宜しくお願いします。先ずお配りした資料の中の日本の政府開発援助（ＯＤＡ）と書いたＡ４版の資料を見て下さい。これを中心に説明します。

それから私の説明であまり細かい内容は説明しませんので、もっと詳しいことが知りたいということであれば同時に配られましたＢ４版の青年海外協力隊とか日系社会青年ボランティアなどについて説明してあるパンフレットのコピーがありますのでこれを見て下さい。より詳しく知りたいという人はインターネットで http://www.jica.co.jp/ というＪＩＣＡの公式ホームページでものすごく詳しく情報がでています。それを自分で調べて下さい。他に個人的に聞きたいことがあればこの３人の顔をどこかで見かけたら何でも聞いていただいて結構です。

それでは先ずこの資料に沿って話します。先ずＪＩＣＡというのは何かということですがそれを語るためにはＯＤＡ（政府開発援助）について述べなければなりません。それは日本の外務省がおこなっていることですけれども、世界の中には発展途上国といわれる国があっていろいろ経済的に困難があったり、インフラストラクチャーであるとか、いろい

ろなものに不足がある、あるいは食糧の問題があったりとか、さまざまな困難に直面している開発途上国があるんですけれども、そこに対する援助を政府として公式に行なっている。それがＯＤＡです。もちろん日本が人として行っている国際協力の中にはＯＤＡ以外にも皆さんご存じのようなＮＧＯであるとか、あるいは郵政省のボランティア貯金のようなそういうものとか、あるいは企業を通じた活動とか様々な民間のものとか、たくさんあるんですけれども、今日はＪＩＣＡ、青年海外協力隊を中心としてＯＤＡについて話します。ＯＤＡというのは Official Development Assistance の略語ですね。ＯＤＡには二国間援助と国際機関における出資拠出の二種類があります。国際機関に対するものというのは国連のいろいろな機関に対する援助で多くのお金を拠出しています。但し今日は二国間援助、すなわち日本政府と対象となる途上国の間で協定を結んで行なう援助についてお話しします。この二国間援助の中には、無償資金協力、技術協力、有償資金協力という三つが含まれております。無償資金協力であれば外務省が直接行うのですが、実施を監督する機関としてＪＩＣＡがある。技術協力の場合であればＪＩＣＡ国際協力事業団が中心になって実施をしている。有償資金協力、これは円借款と呼ばれるものですけれどもこれは国際協力銀行を通じておこなう。これはちょっと前まではＯＥＣＦと呼ばれていた海外経済協



力基金と日本輸出入銀行が平成11年に合併して出来たものです。

今日の話の中心になるのは技術協力というものの中に含まれます。この技術協力の中には様々な分野があります。技術協力とは何かというと「外国から研修者を受入れること」、「専門家を派遣すること」、「技術協力をするための資材を供与すること」の3つから成り立つのですけれども、それらを併せて行なうのがプロジェクト方式技術協力、その他もろもろあります。今日の焦点になるのはその技術協力と青年海外協力隊ＪＯＣＶ、この辺が中心です。その他資料に書いてありますように青年海外協力隊ＪＯＣＶ事務局が所管するボランティア活動としてこういう活動があります。国連開発計画ＵＮＤＰが所管する国連ボランティアＵＮＶ、これなども青年海外協力隊が取り扱ってやっています。その他に国連アソシエートエキスパート、つまり、外務省が実施しているもので日本の若者を国際機関の職員となるための後押しをしている制度があります。そしてこの中で皆さんに関係があると思われるのがこの青年海外協力隊ＪＯＣＶ、それから林さんが行かれました日系社会青年ボランティア、それから年令としては21歳から行ける国連ボランティアなどこういうものがあると思います。あとはＪＩＣＡの職員になるとか、あるいは国際協力銀行に就職するということが将来選択としてありうるかもしれませんが、取りあえず技術協力という分野でいうならば今ここに示した3つのものがあると思います。

そのうち我々が関わっていることについて、今日これからいろいろとお話をしていくことになると思います。

〈司会〉

有難う御座いました。ではＪＩＣＡについて説明していただいたところで3人の方に自己紹介をしていただこうと思います。

〈林〉

皆さん今日は。林直里と申します。よろしくお願いします。まずみなさんにお聞きしたいんですけれども、この中で将来外国に行ってみたい、現実的ではなくてもいいですけれ

ども思っている方どれくらいいますか？ 結構いらっしゃいますよね。そういうお気持ちありますよね。行きたいという気持ち、その気持ちが私がここで話すことになるための一番最初の動機です。私も皆さんと同じように具体的ではないんですけれども、いつかどこかへ行ってある程度の期間住んでみたいという気持ちがありました。その手段として私は日本語教師を選びました。詳しくは後ほど話しますけども、日本語教師の資格をとり、仕事を探しているときに、ＪＩＣＡの日系社会青年ボランティアの募集に出会います。それで日本語教師の枠で受験をしまして、決まりました。たまたま派遣国がメキシコだったんですけれども、これは選べるものではありません。合格通知と一緒に「あなたの派遣国はメキシコです」という通知が届きます。そういうことがあってメキシコに３年間行きました。私の派遣先の日本メキシコ学院のことについては後ほど詳しく話したいと思います。結果的にこの三年間は私にとって非常に有意義なものになりまして、それで今があると思っています。貴重な経験ができてよかったなあと思って、そういう経験を皆さんにお伝えできればと思っていますので、どうかよろしくお願いいたします。

〈川添〉

川添慶一郎と申します。よろしくお願いします。私は横浜市のほうに入りまして仕事をしていたんですが、横浜市の方で地方公務員の派遣条例というのが出来まして、在職のまま一定期間国際機関やいろいろな外国の政府機関に職員を派遣をする条例というのが出来ました。それで協力隊にそれを使って行くことが出きるというのがわかりまして、私はインドネシアの方へ行ってきました。

仕事内容としては村落の開発、農村の開発ということをしてきました。詳しいことは後程お話しします。

〈平井〉

私の場合をお話ししますと、1987年にＪＩＣＡ青年海外協力隊で２年間赴任したんですけれども、その後ずっとＩＥＣの専門家としてパキスタン、ケニア、インドネシア、バ

ングラデシュ、タイ、中国、それから調査団員としてエジプト、タイ、ケニア、タンザニア、インドネシアなどなど、母子保健、家族計画など保健医療プロジェクトを中心に環境や農業普及など、一般大衆への教育普及が重要なコンポーネントであるプロジェクトでＩＥＣという分野の専門家として働いてきました。今日は聞いたことがない言葉がいろいろ飛び交っているのでなかなか話が見えにくいと思うんですけど、詳しいことは自分のところでおいおい話します。それでですね、私はなぜ協力隊員に行ったのかというかそのへんのことが一つ自分にとって人生にとってポイントだったと思います。僕は元々10年間ぐらいテレビのドキュメンタリー番組のディレクターという仕事をやっていたんです。今もその仕事はやってるんですけども、そういう中で自分がたまたま南北問題をテーマにした一時間の大きな番組を作る機会がありました。その時１ヵ月40冊以上の本を読破していろいろ考えて、なかなかいい番組が出来たと自分では思っているんですが、ただジャーナリズムの中で南北問題をやってるんじゃなく、現場に自分が行くべきだという思いがものすごく強くなって、それで行ったということがきっかけでございます。実際どんなことをやったのかということはこれから詳しく話します。

〈司会〉

ありがとうございました。ではお一人お一人参加された活動が違いますが参加の選択過程又参加される前にお仕事をされていた方もいらっしゃると思うんですけれども、それにあたって具体的な準備やいろいろな問題についてのお話しをしていただけますか、お願いします。

〈林〉

まずＪＩＣＡの試験なんですけれども、青年海外協力隊の方は年２回あります。それから日系社会青年ボランティアは年１回あります。それから先ほど申し上げたように海外に行きたいということから出発してまして、日本語教師になって、安易といえば安易なんですけれども、一番最初にきた募集が日系社会青年ボランティアだったんですね。ちょっと

細かい試験の話をしますと、職種別なんですね、受験をするにしましても日本語教師なら日本語教師、看護婦なら看護婦という形で受験をします。一次試験、二次試験とありまして、一次試験の方は筆記で一般常識と英語です。それと日本語教師なら日本語教育の試験をやります。日本語教育能力検定試験の内容を、それなりに勉強していればクリア出来るような内容でした。一次試験を通った後に、健康診断、一般面接、専門面接と受けて決まりました。日系社会青年ボランティアの話なんですけれども、これは対象国が中南米の日系社会に限られていまして、メキシコ、ドミニカ、コロンビア、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン、チリ、ブラジルの８ヵ国です。それで言葉としては、スペイン語かポルトガル語ですが私はどちらもできませんでしたので、どこでも良いという話を面接でしました。派遣先は、希望してもその通りにはなかなかなりません。どういう人が受かりやすいとか、受かりにくいとかというのは実はあまりないのではないかと思います。それぞれの派遣先がこういう人がほしいという要望を出してます。その要望に沿う人が来た場合、その人に決まるという形になりますので、要望どおりの人がいなければ、派遣できません。つまりその人が人物的にどうだということではなく、今回はたまたま自分にあった派遣先がなかったということで落ちるケースが現実なのではないかと思います。試験についてはそんなところです。

〈川添〉

続きまして青年海外協力隊についてなんですが、皆さんにお配りした資料の反対側を見て下さい。青年海外協力隊とはと書いてありまして、左側にその協力する分野と職種というのが書いてあります。協力隊は技術協力という事ですのでこの職種という名称で書いてありますが、いろいろな分野の何らかの技術を持っているということが前提になっております。この職種がたくさん増えてきまして農業の分野から機械や土木、保健衛生、あと教育文化それに飛行機とかですね、本当にいろいろな分野がありますので、たとえば皆さんが学校のクラブ活動でバレーボールをやっていてそれが得意だから自分はバレーボールを教えに行きたい。そういうのでもいける場合があります。

選考は春と秋に年２回募集がありまして各都道府県ごとに試験があります。一次試験としましては筆記試験、スポーツの場合は簡単な実技とかがあるそうなんですが、後は筆記の方ですね。それで二次試験で面接試験があります。あと重要視されているのが健康診断と、やはり健康ですね。それがとても重視されています。

日本は温帯にありましてかなり蒸し暑い方なんですが、熱帯の赤道近くの国々ですとか、あと寒い方の国もありますので、モンゴルとかですね。基本的に基礎体力と健康管理ができる事ということが条件です。僕の場合も健康診断で引っ掛かりました。準備としてはお酒を控えてくれと言われましてそれで一回落ちまして、みなさんほんとに健康診断もばかにできないです。向こうへ行く前にたくさん予防注射をしますし、行った先でマラリアの予防薬、あのマラリアといって蚊に刺されて熱が出る病気があるんですが、そういったものの予防薬を飲んだり、行く地域によって違いますが、そういったこともありますので、かなり体力をつけていく必要があると思います。

あと、選択過程については、自分が行きたいという気持ちを持つことが一番初めで、但しそれと職種をどれにするかということと、あと派遣国というのは自分が実際に申し込んだ時にそこの国から来てほしいと要請が出て、なおかつ受けた人の中で選ばれるわけなので、必ずしも行きたい国に行けるかどうか、わからないんです。けれども、例えば自分がインドネシアの言葉をやっていて、インドネシアへ行きたいといったときにたまたまインドネシアから要請があればそこに行くとか、そういうことがありますし、例えば職種でも、ひとつの国から要請があり自分が合格していればその国に真っ直ぐ行くことができます。それ以外には、受けても必ずしもいけるかどうかはまだ未定だと思います。

〈平井〉

話はだいたい出ましたので、私は全般的なことから付け加えることがあればと思い話します。先程からお二人が言われましたように、日系社会青年ボランティアでもあるいは協力隊にしても、試験の成績がある水準に達するかどうかということで選択がおこなわれるのではなく、まず相手国それぞれいろいろな国から具体的な何々県の学校にこういう先生

が欲しい。そういう職種の要請が上がってくるわけですね。それに対してふさわしい人を選ぶそういう試験ですから、適格者なしということで合格者０ということも随分あるわけです。こうして話を聞いていてもなかなかイメージがわかないと思うので、こういうものに本当に興味があるというなら、今すぐ受験するしないは別として、まず協力隊の事務局に連絡して資料を送ってもらうことですね。詳しい資料をもらえばそこに具体的に全世界の一覧がすべて出ています。いろいろな国から上がってきている全ての職種、どんなところでどういう仕事をする人が欲しいという要請が出ているかの一覧の冊子をもらうことができるので、それをもらって端から良く読んで、自分にできる仕事がないかなと思って見て下さい。そうすればイメージが湧いてくると思います。自分の場合もそれでイメージを膨らませて、あそこに行きたいとか、ここに行きたいと考えていたんですが、結局実際に試験を受けたら全然違うところに行く事になったんです。けれども、そういうものなので、まず具体的な資料を取り寄せてみることをやった方が良いと思います。

私の場合は協力隊に行ったという事をきっかけにして、そのあと国際協力事業団の専門家という、ボランティアではなく国際協力を自分の職業として今までやってきたわけですが、そういう道というのはもちろん皆さんの人生設計の中で有り得ると思うし、いずれにしても協力隊にしても技術協力ということで何らかの技術移転をしうるという専門の技術を持っている人が要請されているわけです。だから漫然と、ただ単に行ってみたい協力してみたい、そういうのでは行くことはできない。だからなにか自分はこれが絶対に負けないという専門技術を持つこと。それが真っ先に必要なことなんですね。もちろん必ずしもそういう高度な専門性という事がなくても出来る職種というのが協力隊の中に用意されていますけれども、しかしまずそういうものを持っているという人が有利であることは間違いないですね。この中ででも例えば看護婦さんの資格を持っている方がいらっしゃるかと思うんですけれども、そういう人というのは非常に派遣職種としては見つけやすい。逆に文系の方というのは難しいわけですよ。日本語教師というのはそういう意味ですごく人気が高いのだけれども、その分応募する人も多いわけですから、そういう点で大変な部分もあります。これからどういう道を取るにせよ、国際協力ということを本当に考えるので

あれば自分がどんなふうに協力できるのか、自分の専門性を高めるということをまず考えなければ駄目ということ。それを最初にお断りしておきたいと思います。

第二部　異文化世界での体験

第一節　メキシコ学校での日本語教育

〈司会〉

ありがとうございました。では続いて３人の方に個別にスライドや映像を用いて説明していただきたいと思います。

〈林〉

簡単にメキシコの説明をしたいと思います。場所はアメリカの下にありまして大きさは日本の５倍ぐらいです。私がいたのはメキシコシティーという首都です。そこは標高2200mほどありまして、メキシコというと太陽とサボテンの国というイメージがありますがそのメキシコシティーは結構寒いです。そういうところに行きました。

具体的に話していきたいと思いますが、私は実は専門知識を持っていませんでした。海外旅行が好きで、何度も行って、行ってるうちに何か物足りないというか、何かが見えないというか、入っていけない。上面のものしか見えないような感じを受けていて、部外者のような感じで外国の人に接するそういう自分が嫌だと感じるようになりました。それでも旅行は続けるんですが、どんどんその気持ちが深まるばかりで、多分これはどこでもいいから、どこかに住んでみて、その人たちと同じ生活をしてみないとわからないことがきっとあるんだろうという気持ちがありました。

ただ海外に行きたいといっても、私はお金がなかったので、留学をするということもできなかったですし、そんなに具体的でもなかったので、とりあえず就職しました。就職はしたんですけれども海外へ住んでみたいという気持ちはずっと忘れられなくて、だけどどうやって向こうで生活するかといったときに留学もいいのですがお金がない。それに、私

は最初に就職活動したとき、結構辛かったんですね。履歴と就職活動がなかなか結びつかないという気持ちをずっと持っていたので、留学後、英語ができるようになっても、また就職活動するのかと思うといやだなと感じるところがあって、そうではなく何かキャリアになるようなことがしたいと考えました。それで何ができるかと考えた時に日本語教師を選びました。もともと興味があり、人に教えることが好きでしたし、私が働いていたところも学習塾でしたので教育関係に関心もあり、民間の日本語教師養成講座に通い始めました。仕事が塾だったということで、勤務時間が午後から始まって夜までということで、午前中は空いていますので民間の養成講座に午前中通ってその後勤務ということを一年半ほど続けました。日本語教師として就職する目安となっている講座の420時間が終了して、日本語教育能力検定試験も受かって、それなりに日本語教師としての資格のような、目安のようなものが手に入ったので、いよいよ実際に日本語教師として、海外で仕事を探したいというのがありました。そこで求人を探すんですけれども、それが無いんです。一番困ったのが日本語教師として就職するには日本語教師養成講座420時間終了または日本語教育検定試験合格。またはとなっていますけれども、試験に合格するには実際420時間ぐらい勉強しないと受からないと思います。それに加えて、日本語教育経験3年以上というのがあるんですね。これが掲げられてしまうと、どうにもならないです。未経験者が、就職の最低条件である実績3年以上という条件をクリアするには一体どうしたらいいものかと大変困りました。でも探すしかないですね、日本で探すにしても海外で探すにしても専任講師という形は実は難しいのかなと思います。それで3年未満とかでも受入れてくれるところを探して、その間を何とかつないで、3年間持っていくしかないのかなと思うんですけれども、この3年間というのをどこで達成しようと考えていた時に日系社会青年ボランティアの募集の時期と重なりました。そこでとりあえず受けてみようということで受けて、あなたはメキシコ、日本メキシコ学院へ行くようにと言われます。

なんでメキシコかというと、このプログラム自体が日系移民の話になるんですけれども、メキシコには日系人がいます。ブラジル日系人やペルーの日系人は有名ですが、メキシコへの移住の歴史も大変古いです。ブラジルなどとは違うところが、日系コロニアがないと

ころです。日系人は、それぞれがメキシコ人の中に取り込まれていったという形で、日系コロニアはメキシコには有りません。そういう移民の歴史があってこのプログラムがあります。私は、11年目の第11回生として出発しました。当時は3年間のプログラムでしたが、現在は青年海外協力隊と同じシステムになり、期間は2年間になっています。参加の条件も今のように休職参加というのがなく、退職することと明記されていたので、働いていた職場の方を退職しまして、そのプログラムに参加することになります。

スペイン語なんですけれども研修というのが出発を前にあります。H系社会青年ボランティアは2ヵ月間でみっちりスペイン語を教えられます。2ヵ月間で頭に入れられることは大変限られていて、とりあえずひととおりの文法事項だけ入れるからと先生に言われて、ものすごいスピードで教えられて出発するという状況です。語学については出来ないよりは出来た方が絶対によいです。その方が自分の精神状態をずっといい状態に保てると思います。余計な心配とか不安とかがたまらないためにも出来た方がいいし、それに超したことはないです。しかし出来ないからといって行けないということではないです。私も全然できなかったわけで、向こうで覚えました。

今度は私の赴任したメキシコ学院ということで少しお話しします。

日本メキシコ学院は、メキシコに在住する日系人および日本人の間で、かねがねメキシコと日本、両国の文化が親密に結ばれてほしいとの熱い願いがあり、当時、そのかけ橋としてタクバヤ学園、タクバ学園、中央学園、そして現在の日本メキシコ学院の母体であるメキシコ日本人学校が存在していました。1974年5月、ブラボ・アウハ教育大臣が日本を訪問し、奥野文部大臣と会談した際、日本メキシコ学院の設立が提唱されました。そして、同年9月、メキシコを訪問された田中首相とエチェベリア大統領との会見の結果、共同声明において、日本メキシコ学院の設立は両国民の相互理解のために画期的な重要性を有するものであり、早期開設を支援する旨が発表されました。永年にわたって学院建設を熱望していた進出企業と日系コロニアは一丸となって、同年9月20日メキシコ国法による社団法人日本メキシコ学院“LICEO MEXICANO JAPONES, A.C.”を設立し、登記を完了して、メキシコ政府は1975年6月20日付官報にて学院設立認可を公布、かつ、学院

への寄付については免税措置を発令しました。以後、日本政府、メキシコ日本商工会議所、日墨協会、日本経営者団体連合会、日本商工会議所、ラテンアメリカ協会、国際交流基金、国際協力事業団、この国際協力事業団というのはＪＩＣＡの事なんですけれども、海外子女教育振興財団、救世国際友好一善協会、等々の全面的な協力を得て今日に至っています。それは世界的に見ても珍しい学校です。

日本人とメキシコ人が一緒に机を並べて勉強しているイメージを想定してしまいますが、実際は日本コースとメキシココースと別々のコースに通うことになります。日本コースというのが文部省の管轄です。日本人が通う小･中学校が海外にあるという感じです。先生も日本の小中学校から選ばれたという先生が派遣されている場所です。ですので日本と全く一緒です。入学から卒業まで全く一緒で、４月に入学式、３月に卒業式という形です。海外の日本人学校というのは義務教育の範囲ですので、あるのは小学校中学校のみで、主に日本の駐在員の子供たちが通っています。そういったコースともう一つ別にメキシココースというのがあります。メキシココースというのは普通のメキシコの私立の小学校から高校までの学校です。メキシコで指定した教科書を使って、８月に始まって７月に終わるというもので、同じ敷地に有るのだけれども、二つの学校があるというような感じです。

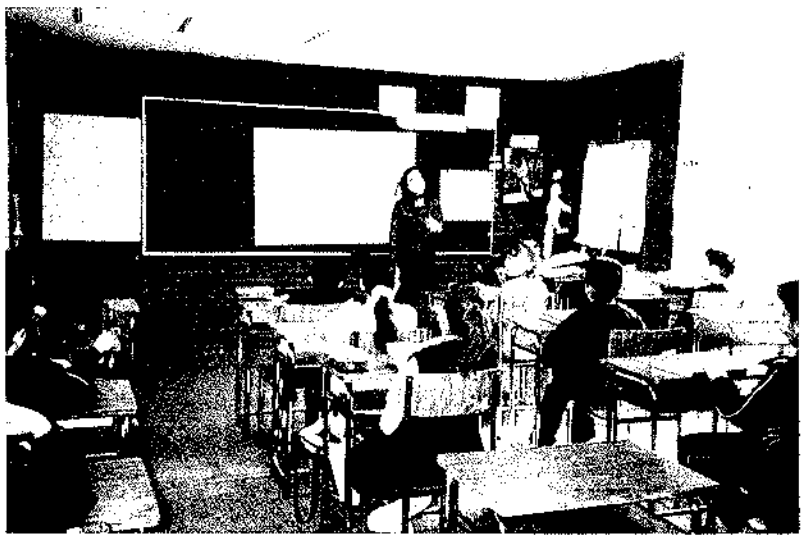
メキシココースというのはもともとの設立が日系人の関係ですので、日系人のお子さんが通っていますが、現在は数少なくなっています。ただ日本の政府もかかわってますし、日本から寄付金なども相当入ってますので、日本語の授業が必須です。小学校１年生から日本語の授業が必修で、単位が取れなければ退学ということになります。これが学校の写真です(写真１)。結構大きく、立派な学校です。制服もあって生徒もたくさんいます。これは授業です（写真２)。日本語の何月何日何曜日というのを教えています。子供たちを飽きさせないということが大切ですので、どうやったら日付を自発的に言ってくれるかと考え、星占いなら自分の誕生日が言えたら占いを読めるということにすれば絶対言ってくるだろうと思って、こういう工夫をしました。

私立の学校ですので、それなりに裕福な家庭のお子さんたちが通ってきています。私の

クラスには、若干の日系人の子供はいましたが、日本語が全然できません。三世四世の時代になってしまって日本語はどんどん忘れ去られてしまっていて、親としては日本語を伝えていきたいという気持ちがあるようです。

写真 1

写真 2



派遣先での経験ですが、最初の１年間というのはとても辛かったです。もう泣かない日はなかったぐらい辛かったです。何が辛いかといいますと学級崩壊です。もう手が付けられない。鉛筆とか筆箱とかが飛び交っていて、走り回っていて、お菓子を食べて人の話を聞かないで、ギャーギャー言って、そのうちそれがだんだんエスカレートして、こっちの方で喧嘩が起こり、そっちで誰々が文句を言って、その対処をしているうちに今度はあっちという毎日で、全然クラスをコントロールできませんでした。それでやっぱりスペイン語力ということになると思うんですけれども、最初にできた方がいいと言うのは、そういう時に役に立つということです。スペイン語ができれば何とかなるんでしょうけれども、最初につまずいてしまうとずっと一年間その状態が続きます。というのは、学校の日本語教育のシステムが、私は小学部で教えていたんですけれども、日本の小学校の５・６年生みたいな教室を想像していただきたいんですが、教室の中に担任の先生の教卓があって、図工とか音楽の時間は専門の先生がきたり、自分たちがその教室に行ったりすると思うんですけども、そういうかんじで日本語という授業に私たちがそのクラスに行って担任の先生は教室から出ます。

日本語の授業は毎日あります。学校は月曜日から金曜日で、たとえば３年生は３時間目が日本語になったら、毎日、８月から来年の７月までの１年間、月曜日から金曜日までの３時間目は日本語ということになります。自分が担当するクラスというのは決まっていますので毎日同じ子供たちと顔を合わせることになります。基本的には３学年受け持つことになっていまして、簡単にいえば３時間目に３年生、４時間目に４年生、５時間目に２年生とか、そういう感じで３コマ持ってやるんですけれども、とにかく最初につまずいてしまうと１年間ずっとそれを引きずらなければならなくなります。クラスは最初だから混乱したのかと思うと一向に良くならない。子供たちはどんどん慣れてきて、どんどんエスカレートして、こちらが指示を出しても何も聞いてくれないというか聞こえないぐらい教室の中がうるさくなる。うるさいから「うるさい」と怒鳴るとよけいヒステリックになってしまって、どんどんそれが増長していく。悪循環です。向こうは先生のことは尊敬しなければいけないという教育観を持っています。ですが教師という職業の社会的地

位が非常に低いので、たとえば子供たちが家で日本語の先生が「こうでね」「ああでね」という話をすると母親が飛んできて、訴えるとか訴えないという話にすぐ発展します。例えば、人間関係が出来ていないのにちょっと触ったら、それを「たたいた」「殴った」、うるさいとどなったら「先生が脅かした」ということで簡単に訴えられます。そういう状況のなかで、途中で担任を替えるわけにもいかず、でも自分ではどうしようもないのでベテランの先生に来てもらったりしますが、そのことによって一時的にはよくなりますが、その先生と比較されるだけで、結果的に自分の首を絞めるだけということになりがちです。毎日怒ってばっかりでした。とにかく怒る。というかどうしていいのかわからない。楽しいこととか、ゲームをやってもみるのですが、最初にこけてしまって崩壊している所ですから、そのゲームのルールすらうまく伝わらない。スペイン語が出来ないというのもありますが、落ち着いて子供たちが聞いてないので伝わらない方が大きいです。伝わらない中でゲームを続行すると、ズルをしたなどで喧嘩になって、また、クラスがくずれてしまう。そういう繰り返しが１年間ずっと続くわけです。

これは私だけでなく１年目の先生はだれでも経験することなんですけども、非常に耐え難いことです。本当に学校へ行くのが嫌で嫌でしょうがなかったですが、学校の先生は学校が休めないので、とりあえず行って、行けばまた教室がワーとなって、どうしよう…というそういう毎日で、月曜日から金曜日までが非常に長かったです。足かせをはめられて一年間歩いていたような感じです。とにかく私は嫌で、こんなにも子供を怒るためにメキシコに来たんじゃない、私は日本語教師として来て、日本語養成講座で習ったもの(大人を対象のもの)とは全然違う、こんなのではやってられないと思っていました。例えば私があと２年、３年やったところでこんな子供たちの状態が変わるはずがない。もう辞める、でも辞めるというのはＪＩＣＡで来ている関係上、簡単には言えないので、とりあえず１年目の年度末まで我慢することにして、それが終わったら帰ろうと思い、飛行機の予約まで入れました。ＪＩＣＡに言わないで、学校関係者にも言わないで、７月までもうちょっと猶予があったので、ＪＩＣＡと学校関係者の人には秘密に、チケットの予約券を手元において置きながら、どうしようかとすごく悩みました。とにかく毎日が辛い、辛い

ことしかない。最初のうちはスペイン語も習っていたのですが、自分が授業に余裕が無くなってきて、とにかくすべてが悲観的なのでスペイン語学校に行ってる時間があったら明日の教案を考ねばと、スペイン語学校も辞めました。そういう暗い気持ちで教案を考えると、暗い教案しかできないんですけれども、でもそういう落とし穴に入り込んでしまい、抜け出せないんです。けれどＪＩＣＡから派遣されているという大きさもあって、どうしようかと悩んでいたんです。

それで独りよがりになってしまってはいけないと思い、いろいろな人に相談しました。相談していたときは、もうやめて日本に帰りなさいと言ってもらいたいんだと思うんですけれども、誰もそれを言ってくれなかったんですね、だいたいみんな頑張りなさいと言います。結局、誰も辞めたらって言ってくれなかったんです。どうせ私のことなんか他人にはわからないんだという境地に陥り、最終的には親に泣きつくんですね。私ね毎日こんなでもうやってられないから家に帰るからと電話しました。そうやって悩んでる期間があったんですけれども、結局最終的に帰らなかったんです。その一番の理由は親に帰ってくるなって言われたんです。中途半端にやめて日本に帰ってきたって、ましてやめて帰ってきたなんてますます仕事ないんだから帰ってくるなと言われました。親に帰ってくるなと言われたら、お金もないですから住むところもないわけで、帰ったってすぐ就職なんか、もともと就職で辛い思いしてますから、できるわけないし、もういい、ここにいるよ、となかばやけっぱちでメキシコに残るという成り行きになりました。勿論気持ちの上では全然納得いっていなかったんですが、帰ってくるなと言われたんで仕方がないというところです。

つらい一年間、いろいろな問題がありました。母親が文句言ってきたり、うるさいといって子供の筆箱をたたいたら壊してしまったり、数々の事件を巻き起こし、同僚に迷惑をかけ、子供たちとはますます溝を深め、ようやく一年間はたちました。８月に夏休みになります。夏休みは適当に過ごして、また新学期が始まるんです。それがすごく憂鬱で、どうせそんな３～４週間休んだくらいで、授業が上手くできるようになっているわけがないし、でも帰るところはないから、しょうがないから学校へ行く。そんなスタートだっ

たと思います。

そして新学期が始まり、今年の担当学年が言われるのですが、私は小学校の低学年を主に持っていたので、クラス替えをしても昨年と同じメンバーが数名クラスの中に含まれているわけです。またこの子だ、やだなぁとそんな思いばかりでした。それが自分でも何がどう変わったのかわからないんですが、一年目の失敗を繰り返してはいけないというか、あのつらい一年間を引きずってはいけない、引きずるようなことを起こしてはいけないという恐怖観念にかられて、とにかく最初に、スペイン語も一年たっていますから、どういったらうまく伝わるということもだいたい体得していて、とにかく最初が肝心だと思って、そんなに意識したつもりはないですけれども、楽しい事に徹し、この先生は楽しいからもしかしたら良いかもしれないと思わせるよう努力しました。そうしたらその一年目の苦労がウソのように、あれは何だったの、というようにクラスがコントロールできるようになりました。この差は何だろうというふうに考えたんですけれども、やはり最初の一年間の辛さというものを自分なりに反省してるんだと思います。それで結局クラスがうまくコントロールできるようになって、そうしたら子供を怒らなくていいんです。人間関係もでき、「ちょっと静かにして」と言えば静かになるし、これをやりたいんだけどと言ったら「いいよ」と簡単にできるし、去年の苦労が何だったのというぐらいいい自分で統率できるようになるんです。そうなってくると養成講座で習ったような日本語教育というものができるようになってくるんです。日本語のゲームのようなもので子供たちを自由に遊ばせても管理できる、掌握できるというものをどうにか身につけて、それ以降世界が一変しました。自分の中身も相当変わり、明るくなりました。

もともと明るい性格なんですけれども、一年目は非常に悲観的になっていたので別人のように変わりました。そういったところから、こんどは逆に、子供に対する日本語教育がすごく面白くなりました。海外で日本語を勉強している子供は実はたくさんいます。日本語の教科書というのがたくさんあるんですけれども子供向けの日本語教科書というのはあまりなくて、特に毎日一年間同じ子供に教え続けるための教科書は全然ないです。それでそういうものを作っていきたいと思って、教科書作成委員会の委員長もやったりして、す

ごく変わりました。それで、私は帰国したら海外で勉強している子供のための日本語の教科書をつくるんだという勢いで帰ってくることになりました。結果的にはそうならなかったんですけれども、そういう経験をしました。

文化的なことに関する理解なども世界が一変していく中で考える余裕というのもできました。私は子供の立場に立っているようで立っていなかった、怒らなくてもいいということすら気がつかなかった。怒らなければいけないから嫌だ、だから帰りたいという発想になっていましたので、間違っていた自分、見えていなかった自分に気がつきましたし、子供の日本語教育に対する関心もできました。それ以降、いろいろなものを受け入れられるようになったと思います。

そういうつらい経験をした後は、天国のような毎日で楽しくて楽しくてしょうがなくて、帰国も泣く泣く帰ってきたというかんじです。帰ってからは、子供のための日本語の教科書をつくるというようなところが存在しないので、困ったなあというところに青年海外協力隊事務局にきている求人情報を参考にして、今は財団法人川崎市国際交流協会というところで働いています。

外国人のための日本語講座もありますが、今は教える側ではなく、日本語を教えるボランティアさんを管理するということをやっています。以上です。

第二節　スラベシ島でのコミュニティー開発援助

〈司会〉

ありがとうございました次は川添さんお願いします

〈川添〉

私はインドネシアの方に行ってきまして、その時のスライドがありますのでそのスライドを見ながらお話しをさせていただきたいと思います。

私が行ったのはインドネシアの中のスラベシ島というところで、Kの形をした島なんで

すが昔はセレベスと言っていました。

インドネシアは赤道の近くにありまして熱帯の国です。気候としては乾期と雨期といった乾いた季節と雨の季節という２つです。日本は４つの季節がありますがそこは２つだけです。南スラベシというところへ行きまして、そこも田んぼの風景が広がり米を食べている稲作が中心の地域です。年に２回おコメをとるかもしくは乾期で雨が降らなく水が少ないところでは落花生、ピーナツ、トウモロコシなどを作っています。

これはトウモロコシの収穫の風景です。トウモロコシは日本のトウモロコシと比べるともっと小さいんですが、人間も食べますし一部は家畜などにもあげたりしています。

これは石のうすで木の実などをつぶしているところです。たぶんアジア一帯そうだと思うんですが香辛料をたくさん料理に使いまして、いろいろな種類のもの、唐辛子もそうですけれども、それをつぶして料理の素にして使います。インドとかバングラデシュとかあの辺ですとカレーの素は色々な香辛料をこうやってつぶして入れますが、インドネシアでも石のうすでこうしてつぶして入れます。

これは薪割です。燃料は灯油とかもあるんですがやはり薪を使っていますので子供が薪を割っているところです。

これは村のモスクです。小さな集落ごとにモスクがありまして、イスラム教の礼拝をするところです。イスラム教は一日のうちに５回御祈りをすると言われてました。ここはもちろんお祈りもするんですが村の人たちと集まりを開いているところです。インドネシアのスラベシの社会でも集まりというほか、みんなで話しをするのがとても大切でして、「ムシャワラ」と言っていますが、村の集会を開いて今、村で必要なもの、どういう生活をしているかということとか、どういうものが必要なのかというようなことの聞き取りをしています。

その中の一つとして行なったことが家庭用トイレを作ろうということです。この輪っかがあるのが家庭用トイレのもとになるものなのですが、左側にありますのが向こうの家です。高床式の家でして一階というか、空いた部分に家畜ですね、馬とかをそこで休ませたりあとそこに木の台を置いてですね、そこに農作業で使う道具をおいたり、人間がそこで

涼んだりするときにも使っています。高温で湿度もとても高くて、とても熱いところですので高床式にして風通しを良くしてそういった家の構造でこういう所に住んでいます。

これはトイレ造りで村の人たちが穴を掘っているところです。こうやって子供もたくさんいました。

これはちょっと重かったのでみんなで持ち上げて下ろしているところです。初めは作り方もわからなくていろいろ工夫していたんですが、実際は作ったものを入れるよりも、こうやって穴を最初に掘って、その中に直接セメントを入れ、固めていったほうがいいということが判りました。地上ではセメントが途中で熱帯の場合は乾いてひびが入ってしまうのですが、穴の中で作るとその乾きがなくて、村の人たちが言っているように穴の中で作った方が丈夫なものが作れます。これはトイレのできたところですね。

〈会場からの質問〉

なんでトイレを作るんですか？

〈川添〉

あのトイレがなくてですね、もともと村でトイレづくりをしようという計画が集落であ

写真 1

あったんです。やはり衛生面を考えて、今までトイレを家から離れた遠くの小川まで行っていたんですけども、それを近くでしたいということです。

〈会場からの質問〉

肥料にするといったことではないんですか？

〈川添〉

まったくこの地域ではそういうことには使ってないんです。牛の糞については肥料にしようということがあったので、藁とかを混ぜて肥料にしようというのがあったんですけれども、人間の場合はそういうのは全くなかったので、リサイクルはしてなかったです。

住民の方の生活なんですが、行った地域は海と山と両方ありました。

海の方ではいろいろな海産物がとれます。これは干したナマコですね。ナマコというのをみなさんご存じかどうかわからないのですけれども、長細くて柔らかいもので海の中にたくさんいるんです。沖縄の海とかですとたくさん見かけることができますが、熱帯の海にたくさんいて、これは乾かして、切ってもどして中華料理の材料などにします。中華料理の材料として実際にかなり高い値段で取り引きされると言われています。鶴見良行さんもくわしく調べています。

写真ではわかりづらいんですけれども後ろの方に水牛とかたくさんいまして、南スラベシのちょっと山の方に入っていったところにトラジャ地方というのがありまして、そこは熱帯の高原地域なんです。そこではトラジャという人たちが住んでいまして、その地域では農耕に水牛が使われるというのと、あとここは水牛の市場、市が立っていたところです。コーヒーもたくさんとれました。日本の企業が入って、トラジャコーヒーというと皆さん聞いたことがあるかもしれませんがトラジャコーヒーを作っています。

これは村の人です。一番左に立っているのが私なんですが、村の人と話しているところです。ちょっと説明しますと右側に父親と母親と子供たち、イスラム教で女性は頭に白い

布をかぶっています。サウジアラビアとか、イランですと普段でも厳格なイスラムだと思うんですが、インドネシアの方はまあ地域差はありますが、スラベシの方のイスラムの人はそれほど日常生活の中でイスラムの形をきっちり守っているということはなくて子供たちもとくにかぶってませんし、女性もお祈りに行くときかぶって行くんですが、普段は外していることの方が多いです。

これは子供の子守りをしているところですね、おばさんがちょうど先程の高床式の家の下にで竹で編んだ台がありまして、そこの上で子供をあやしてしているところです。

これは私が下宿しておりました家のお父さんとお母さんです。

これは村の結婚式なんですが、先程の高床式の家の張り出た所で、結婚式があるときに料理の準備をしているところです、村の近所の人たちがかなり大勢でお手伝いに来ています。

写真２は本人の花婿花嫁で来るのをみんなが迎えているところです。特に村の結婚式は特別結婚式の場所とか式場とかもちろんありませんで昔の日本みたいにそれぞれの家に飾り付けをしてそこで行っています。

写真 2

これも結婚式のところなんですがこの一番右にいる人、この方男性だと思いますか、女性だと思いますか？胸を見ていただくとわかるんですが、この方が男性なんですがこの人が結婚式の着付けをする人なんですね。この方も実はお化粧しているんです。実は男性なんですが女性のような男性で、この人は結婚式の美容の着付けをする人です。この方もお化粧してるんです。男性なんですがほんとに女性のような男性、そういう人が花嫁さんというか女性の方の着付け、男性もかなり着飾るんですが、女性の方に対しても髪の毛をやったりというそういったことをやるという人がいました。男性と女性の中間ぐらいの位置づけの人ですね。

これが結婚式の飾り付けを終わったところです。まん中の人が隣に住んでいる人で同じ職場だった人なんですが、右にいるのが花婿花嫁とこちらにいるのが私です。

以上でスライドは終わります。

大急ぎでスライドを見てもらいました。私は村落開発ということでいったんですが先ほどの職種ということでいいますと、横浜市に入ってからずっと福祉局というのがありまして、福祉関係のケースワーカーの仕事をしていました。当時はソーシャルワーカーという協力隊の職種がなく他に特別な技術的なことというのはなかなか無くてですね、どれで行こうかとか迷ったとき、専門的技術というよりも社会経験とかが必要だと言われまして、それで「村落開発普及員」という職種に応募して行くことになりました。２年間行っていたんですが、何が大変だったかというと、まず言葉。言葉ができないと言っていることがわからない。コミュニケーションが大変だったのとやはり暑さで、赤道の国ですのでとても暑かったのですね。それでその暑さでかなりばてたというのがあります。やはり行った中でだんだんと相手の言っていることがわかったり、こちらの言いたいことが伝えられるようになってくると、だんだんと適応してくるというか体が慣れてくるというのと言葉が慣れてくるという両方が必要だったと思います。

村落開発というのが今でもなかなかわからないんです。村の中で何をするか、トイレが本当に必要だったのかという質問があったんですが、今も実はそれがわかんないんですね。果たして何で行ったのかというと日本にも外国の方がたくさん来るようになりましたよね。

それでそういった人たちが一体どういう生活をしているのかなというのも関心があって行ったんです。行ったのは結局農村地帯だったんですが、若者はいることはいるんですが若者の中にはかなりの部分マレーシア、スラベシの隣がマレーシアのボルネオ島(インドネシアではカリマンタン島という)という大きな島があるんですが、そちらのマレーシア側のサバ州・サラワク州の方に働きに出ている方が多いんです。それで、そうすると村で何が一番必要かというと若い人のできる仕事が必要なんだなと思い、でも仕事づくりというテーマはすごく大変で、村で仕事が無いから皆さんマレーシアへ働きへ行っているんですね。どうしたらいいのかなと思って行って、何らかの村の特産品とかですね、そこでつくるピーナツを加工しなにか美味しいピーナツを炒めて味付けして何かできないかな、とそういったことを考えていたんですが、私が行ったのは協力隊ではあるんですがチーム派遣で行ったんです。

グループで行きますと協力隊にしてはかなりたくさんの予算がつきますが、個別の活動については制約もあります。それでプロジェクトというのは、だいたい5年間の期間を決めまして、一人ずつの人間はたいてい期間2年から3年その村に滞在する。交代でその5年間のプロジェクトをこなすものです。計画の準備段階として一年間調査をして計画を作ります。実際に入ってから5年間活動するんですが、3ヵ月に1回ずつ報告書を作りまして半年に1回ずつそれぞれの単位で国レベルやその下にある州、県というレベルで報告会を開きます。また中間報告というのも5年間の半分のところで報告しますし、最終のところでも報告する。その都度プロジェクトがどういうふうに進んでいるかをチェックしまして、評価ということなんですがそれがうまくいってないところは、それはどうしたらいいか、それぞれ日本語とインドネシア語で報告書を作ってそれぞれに話し合いをするわけですね。そういった形で進めていきます。そうしますとかなり具体的な評価を、ある意味で目標としていますので、ある程度評価に耐えると言っては変ですけれども目に見えるものを、評価リピートしやすいものを作っていかなければならないというのがありました。村落開発というのはもう少し人造りというかさっきの仕事造りみたいなところを自分としてはやりたいと思って行ったんですが、現実的に、半年ぐらいは村や、いろいろな家

を訪ねて聞いたり集落での聞き取りをやった後に実際一番大きかったのは生活用水を汲みに行くのが大変だというのがありまして、湧き水を１キロぐらい先まで汲みにいかなければならない。普段使う生活用水というのはそういうところにあるというのがありましたので。生活用水を山の方から村の真ん中の方まで引いてくるのが必要なんだろうということで、生活用水プロジェクトをやりました。具体的にはその湧き水を引いてくるのにどのくらい距離があるのかですとか、高さとかを調べるのに測量ってありますよね。機械を使って距離で高さを測る。そういったものを使って測りまして、最終的にはそれを鉄の小さいパイプを使って村の方まで引いてくるということの準備をしました。それとあとはトイレ、家庭用のトイレがないのでトイレ作りというのもやりました。

ただそういった中で、出来れば自分としては仕事をするとしたらもう少し村の中でも一番奥まったところ、奥まった村とかで、村の中でも貧しい地域というのがあるんですけれどもそういった所で活動がやりたかったと思いましたが、そういったことはなかなかできませんでした。村の中でいろいろ感じた事というのは、私はその村のすぐそばの町に下宿して村へ毎日通う生活なんですが、向こうの人たちの生活の中で大切にしているというのがお祈りで、とても大切にしていました。普段はとてもゆったりとした感じなんですが、ただ、お祈りというのは本当に大切にしていまして１日５回決まった時間になりますと近所のモスクにお祈りに行きます。あと普段のおしゃべりをとても大切にしていて、夕方の夕暮れ時の時間はとても大切で近所の人と皆さんおしゃべりをしていました。それと暑い時はどうするかっていうと昼寝をするんです。あの一番涼しいところで昼寝をする。よく暑い所の人は怠け者だというようなことを言う人がいるんですが、必ずしもそうではなく、朝の涼しい時には農業に、仕事に行きますし、夕方の涼しい時には畑とか田んぼの仕事をし、昼の一番暑いときにはゆっくり昼寝をする。そういうリズムというのがとても大切だと思いました。自分はそれが現実に解らなくて、外で見ていると脱水症状というか、ほんとうにクラクラになってしまって一日ほんとにヘトヘトなってしまうんですよね。そういったことを体験してきました。

向こうの人たちと一緒に生活をできたというのはほんとうによかったと思うんですが、

あとそれぞれみなさん外国に行かれるときも、行った先の、歴史とかをある程度知ってからいかれるといいと思います。

インドネシアも多分今は熱帯の国とか、バリ島とかといったイメージで知られてはいるんですが、実際には昔から、例えば私がいったスラベシという地域はアジアの中では交易が盛んなとこでして、ブギス人といわれる人達が、マレーシアの方にですね、場合によってはインドの方まで出かけて行っていろいろな交易をおこなって、船をこぐ海洋民族と言われてまして、とても交易を盛んにしていた時代が続きます。そういった歴史があるので今でもマレーシアへ船でひょいと行っています。そういったことを歴史的な背景として持っているのかなと思いますが、その後は約350年間オランダによる植民地の時代がありました。それはひとつの大きな都市を中心としたもので、ジャワとかを中心とした植民地の歴史がありました。その後４年間日本軍の軍政、４年間日本軍が駐留した時代があるんですね。今でも「バカヤロー」という言葉が残っていて日本人がきたときのことを覚えている人が村の方でもいました。南スラベシの田舎の方に住んでいたんですが、そこもそういう日本人は来たんだなというそういうような背景があります。その後独立戦争を経て独立したんですがインドネシアの中でも地域格差というのがありまして、中心にあるジャワ島と回りにある島を比べるとちょっと違いがあるということがありまして、いろいろな問題を抱えている。

それとあと宗教的なことですが、ラマダンというのがあります。イスラムの宗教の中で断食月というのが一年に一回必ずあるんです。それは、朝日が昇ってから沈むまでの間食事をしない、食べ物を口にしないという事です。今でいうダイエットで食事をしないというのではなく、イスラム教の神にそれが一番近づける方法、アラーの神様に近づける方法としての断食ということで、もう一つには空腹を通して自分が世の中にある餓えという状態や人々を知るということだそうです。また一年を振り返ってのつぐないもします。断食は一人ずつやるんでが、実際にやってますと、私も２年目のときにそれをいっしょにやったんですが、職場の人とか、もちろん下宿先の人もとても協力してくれまして、今日も続いたかというのを毎日のように聞いてくれるので何とか続いているというふうに答えて、

互いにはげまし合いそれで何とか続きました。

断食といってもですね、朝出かける前朝四時半とか五時くらいまでは食べてもいいんです。4時ぐらいに起きまして、簡単なものを少し食べます。朝日が昇ったら何も食べないのですが、日が沈む6時とか6時30分ぐらいになるとその時間というのはみんなもうあと何分ぐらいだというのを待ってまして、その時の特典みたいなものがありまして、断食用のお菓子を作ってあるんですね。それで各家に、普段はあまりお菓子を食べないのですが、甘い羊羹のようなものですとか、ココナッツで作ったものとか、それとあとお茶とか飲んでそれを飲んでから後に御飯を食べるというような事をします。それがインドネシアだけではなく世界中のイスラムの人がそういったことをしています。

あと衛生面で気をつけるということですが、熱いので水浴びをするということですね。毎日1日1回ではなく朝も浴びるし、昼も浴びるし、夕方も水浴びするということです。

日本に帰ってきてから感じたのは、私、仕事をしているんですが、日本に自分がいなくても日本は何とかなっている。ようするに行く前は自分が何かして行こうという気持ちがあって行ったのですけれども、自分がいない間日本の職場を抜けるので先程言いましたように、休職派遣という制度で行ったので職場の人手が足りない部分を何とかしてとか思って行ったんですけれども、帰ってきてみると何とかなっている。ようするに日本の社会というのは、とても組織的になっていて、いればいたで、することはあるんですけれども、絶対に自分がいなくてはいけないと考えなくてもいいのかなというそんな事を思ったりしました。今職場にもどりまして仕事はしております。

それで今一つ言えるのは自分が日本の側からだけ見るのと、例えばインドネシアから見たらどうなのかといった、そういった視点をもてるようになるのかなと思いました。行っている間にO157の騒ぎがありましたけど、インドネシアの人もテレビは良く見てまして衛星放送もバラボラで見ていまして、日本の衛生状態をとても心配していました。日本は大丈夫なのか、今こういうのがはやっていて、というのをとても心配していましたけれども、インドネシアのほうでは逆にNHKの3チャンネルのテレビを見ていましたら、寄生虫に関する面白いプログラムを見ました。寄生虫というのを昔の日本人はおなかの中に皆

持っていたそうなんですが、カリマンタンと日本を比べて見ていたんですが、自然に適応して細菌をお腹に持っている時はいろいろなアレルギーとか出てこなかったらしいんですけれども、ただ回虫がいると下痢とかはあるかもしれませんが、そういうのを全く無くしてしまってキレイにしてしまいすぎると、今度またそれなりの抵抗力というのが無くなってしまうという事もある。そう考えると両方の価値を持つというか、日本は日本で確かにとても快適で便利な社会ですけれどそれだけでいいのかなというのを感じます。インドネシアはとてもゆるやかな社会で家族の範囲が決まってなくて、家族のくくりがとても広いんですね。それでいとこから、いとこのいとこまで家族で、しょっちゅう出入りをしていて、いつも泊まりにきているという関係がありますから、ということは私なんかが行ってもああよくきたという感じで受入れてくれるような社会です。

あとは仕事の基準が日本の基準できっちり評価を出すものをやるというのではなくインドネシアの人みたいに普段はゆっくりゆっくりやり、いざという時はちょっと急ぐというペースが自分に合っていました。

また後で質問とかありましたら受け付けます。

〈司会〉

ちょっとお伺いしたいんですけれども、川添さんがインドネシアでボランティアということだったんですけれども、実際日本からの青年海外協力隊という形で現地へいらした時に現場の人たちというのは日本から来る隊員というのをどのように受け止めていたかというのを聞きたいんですが。

〈川添〉

行った先では初めての日本人だったんですが、村の人たちの方がただ個人的な関係というかそこの村にも泊めてもらったりしていましたので、日本人か、というので個人的に受け入れてもらえたと思うんですが、向こうの役場になりますと確かに協力隊で行く人たちの年代が若いんですね。二十代、三十代で何をしにきたんですかという感じで確かに見ら

れます。特に何かをできるというわけでもないですので、そういったところではあの一緒に動いているというか、まあ教えてもらいながら向こうの人達もそれぞれ例えば保健活動している人とか、畜産の仕事をしている人とか、農業をしている人とかそれぞれあるんですけれども、そういったところに仕事を教えてもらいながらそれでなおかつ自分たちのできる事は何かということを探してやってきました。また、インドネシアでは協力隊をボランティアとは名のらずジュニア・エキスパートと言っていました。

第三節　スリランカとエジプトでの教育広報普及活動

〈司会〉

ありがとうございましたそれでは平井さんお願いします。

〈平井〉

いまはインドネシアの話でしたね。インドネシアのバティックを着込んだ結婚式の写真が印象的な川添さんでしたけれども、今日は私の方がインドネシアのエスニックな雰囲気を漂わせてみようかと思い、バティックをわざわざ着てきました。協力隊の場合、派遣の要請が出てから実際に隊員が派遣されるまでの時間的ギャップというのが結構あったり、あるいは要請というのが現場にいるＪＩＣＡや協力隊の現地の事務所で働いている人たちがいろいろと集めてくるんだけれど、情報が正確でない場合もおうおうにしてあるので、いざ現場に行ってみると仕事がないというような事例もままあるんですよ。

自分の場合は協力隊の時はスリランカの国立の一番大きな大学に行きました。それは工学部で視聴覚をやるという事で行ったんですけれども、行ったら向こうが妙にあわてているので、どうしたのかと思ったら僕が来ることを、私を要請したということを忘れていたわけなんです。実は日本に対する要請を出しつつ、イギリスに対しても要請を出していて、イギリスのＶＳＯというボランティア・サービス・オーバシーズという、そういうJOCVみたいなものがあるんですが、そこからボランティアがきて、でもそいつはここには俺の

仕事はないと言って帰った。その後にぼくが突然やってきた。で相手のスリランカの大学の人達は大変驚いたんですね。実際には全然何をやったらいいのかわからない、言葉も最初のうちはなかなか通じないし、コミュニケーションにいろいろギャップもある。だったんですけれども私は自分で仕事を開拓した。協力隊員ではそういう人がすごく多い。そういう根性がなかったら、こんなところに私はいられないな、と思ってすぐ帰るしかない。でも日本人は日本人のメンタリティーとして、もうみんなに送別会もしてもらって、餞別までもらって出てきたのに、そんな半年ぐらいで帰っちゃったらまずい。林さんからもさっきそういう話があったけれども、そういうので結局根性出して二年間頑張る、頑張り通してしまうという例が多いわけですね。でも白人はすぐ帰ってます。

それで僕の各論に入る前に、二人の話を聞いていて自分も隊員時代を思い出したんですけれども、1ヵ月目、3ヵ月目、6ヵ月目、そして1年目という周期的にドカーンと爆発する、そういうカルチャーショックというか異文化体験、異文化接触の中から出てくる爆発っていうのがある周期を持って必ず来るんです。とにかくなんか無性に腹が立つ、スリランカ人のやることなすこと何からなにまで腹が立つ。オートリクシャーの運転手とけんかしちゃう。だけどもう非常に後味悪いですよ。よく考えてみると俺はあんなに偉そうに「お前はばっている」なんか言ってけんかしてますけど、じゃあ日本にいる時日本のタクシーの運転手とあんなに本当にけんかするんだろうか、まずしないですね。相手が無力な人間だと思って自分が見下してるんじゃないか、そういうのですごく自己嫌悪にとらわれたりしながら、でもやっぱり時折爆発するときは必ずくる。多分みんなそういうことを経験してきた。そういうのを経験しながら、とにかく言葉に慣れ、コミュニケーションをとっていく、それをいかに早くやるか、そこなんですね。

協力隊などの派遣国には熱帯の国がやっぱり多いので、まあメキシコなんかは涼しいところみたいなんですけども、食べ物とかが合わないとか、スパイシーで辛いとか、暑いとか、新しい生活に慣れません。スリランカは本当に暑いと辛いの極致なんですけれども、この暑いのと辛いのはスリランカに到着した日に強烈なのを食わされて、先輩とかがわざとそういうところに連れて行くんですよ。そのときにあまりの辛さに涙や鼻水がでちゃう、こ

んなものをこれから２年も食っていくのはとても無理だとおもったら、いや辛いのと暑いのは慣れると言う。確かに３ヵ月経つと不思議と食えるようになる。汗もそんなにかかなくなる。で、まあ辛さに象徴されるようなそういう異文化との接触。コミュニケーションしていく能力というものを自分自身が高めていく。そのとき自分が今までの日本の経験とか価値観でもって人の事を判断して、高見から見下ろしてお前ら教えてやるみたいな、そういう態度では絶対コミュニケートできない。そういうものを自分自身が学んでいくということですね。そういう姿勢を自分自身が学んでいくこと。それが協力隊の中で学んだ一番大きなことだったのではないかと思います。

私は協力隊というものを経て、そのあとＪＩＣＡの中で専門家という形で国際協力ＯＤＡの技術協力の分野を実施するような仕事を職業として選んでやってきたんですが、さっきも言ったように、随分あっちっこっちに行きました。そういう中で印象に残っている仕事というのは、やはり協力隊っぽいというか、実際に地方の現場に入って、そこの本当の農民というか現地の人達に近いところで一緒に接しながら働いた経験というのに印象深いものがあります。そういう例の一つとして私の場合エジプトでの経験をご紹介したいと思います。

配った資料のなかにエジプトの母子健診活動のためのビデオ制作というのがあります。はじめにというのにＩＥＣと書いてありますが、このＩＥＣというのが私の専門分野で、Information Education and Communication のことで、これは何だろうというと日本で言えば教育広報普及活動、特に一般のコミュニティーの人々というものに対して、ある一つのプロジェクト、それは母子保健であったり、あるいは家族計画であったり、あるいは農業の普及ということであったりいろいろその都度プロジェクトの目的は違うんですけれども、その目的を促進する知識を一般のコミュニティーの人々に普及あるいは、広報、教育していく。そういう活動のことをＩＥＣというふうに呼んでいます。これはよくアメリカで使われる、アメリカの息のかかったフィリピンなどでもよく使われる言葉です。そういう分野のこと、私はもともとテレビのディレクターですから、その中でも教材あるいは広報の資材を作る仕事を主にやっていました。

エジプトの母子健診活動のためのビデオ制作

1.はじめに　（健やかに赤ちゃん育てば二人で十分!?）

1991年1月、エジプト・アラブ共和国（この年この月何があった？）

IEC (Information, Education and Communication)専門家

2.エジプトの母子保健

エジプト全土の主要人口指標の変化

指標	１９８８年	２０００年
人口	5,145万人	6,830万人
粗出生率	38 / 1000	26 / 1000
自然増加率	2.8%	2.0%
乳幼児死亡率	73.1 / 1000	52 / 1000
避妊実施率	37.8%	55%

上エジプト地方の母子保健 Maternal Child Health (MCH)と Family Planning (FP)

「ダヤ」は上エジプト地方の伝統的産婆（TBA (Traditional Birth Attendant)）である。

DTP(三種混合ワクチン＝ジフテリア、破傷風、百日咳) 及びポリオ(小児マヒ)生ワクチン予防接種率（法定義務接種）

エジプト全土都市部平均	82%
下エジプト都市部	74%
上エジプト都市部	55%
上エジプト農村部	52%

3.エジプト母子保健人口家族計画プロジェクト

1986年　エジプト政府「新人口政策」をスタート、1989年　日本政府の協力開始

エジプト側カウンターパート機関は国家人口審議会 NPC (National Population Council)

産婦人科移動検診車による母子保健健診活動が核

4.検診活動の普及と理解のためのＩＥＣ活動

IEC活動の目的

「移動検診車プロモーションビデオ」の制作

「宗教者～村の指導者～男性たち～女性たち」段階を追ったアプローチ

5.ビデオ制作の苦労と実際

6. IEC活動の重要性と難しさ

上エジプトでの成果の全国への展開

エジプトの首都カイロに私が初めていったのは1991年の1月なんですが、この時に大変大きな出来事がありました。何だったでしょうか、覚えている人だれかいますか。10年前、中東で大きな変化がありました。湾岸戦争ですね。ええ1月11日にアメリカを中心とする多国籍軍が、サダム・フセインのイラクを攻撃した。それが湾岸戦争というものの始まりですが、皆さんは今18歳っていうと10年前は8歳だったから湾岸戦争って言われてもああそういえばそんなことがあったなというぐらいのものかもしれないけども、その時に始めたプロジェクトです。

エジプトというのはアフリカ大陸の上の端っこのところですね。エジプトは北が地中海ですね。それでナイル川がスーダンの方から流れてきていて、だからナイル川は南から北へ流れているわけです。カイロがありそこからデルタになっているわけです。扇状に広がって川がいっぱい分かれています。そして地中海のほとりにはアレキサンドリアがあるわけですね。エジプトというのはこういうところなんですけれども、実際行ってみるとこのナイル川のこの両岸だいたいせいぜい数キロの間だけです、緑があるのは。川のほとりにわずかに緑があるだけであとは全部砂漠です。このようにナイル川に沿っての細長いところに緑がありそこに人間が住んでいるというそういう場所です。

私がプロジェクトをやっていた所はルクソールという観光で有名な町があり、その近くにあるナガハマディというところでして、この地域はサトウキビの生産で非常に有名な所です。

エジプトというとピラミッド、砂漠、ナイル川というのが有名で、今言ったように農業とかをやっている国なので、砂漠ばかりであまり人がいないんだろうと思われるかもしれませんが、実は中東、北アフリカ地域では人口最大の国なんです。周辺にはアラブ諸国がいっぱい並んでますが、あの中では最も人口の多い大国です。配った資料にもあるように88年の時点で5,145万人、現在で6,830万人という国ですね。

この国に私は湾岸戦争が始まった年に行ったわけなんですけれども、何しに行ったのかというと、先程申し上げたＩＥＣ、つまりコミュニティ、一般住民を対象とした教育、普及、広報活動です。家族計画普及のような地域住民を対象とする活動では住民自身の参加

が必須です。まず対象となる人々の、例えば家族計画に対する正しい知識(Knowledge)を増進し、現状に対する人々の認識・態度(Attitude)を変化させ、さらに具体的な行動(Practice)に踏み出させます。ＫＡＰの現状を調査して、望ましいＫＡＰへ向けて効果を上げられるＩＥＣ活動を行う。ＪＩＣＡの実施する人口教育・家族計画分野における技術協力でも、ＩＥＣ活動の果す役割は大変大きなものとなっています。

母子保健に関する詳しい統計は配布した資料を見てください。私が働いておりましたエジプトの上ナイル地方の農村部には1988年当時で１歳未満の乳幼児死亡率が117/1,000と非常に高い数値を示す地域もあり、エジプト国内でも特に母と子の健康が困難な状況にある地方でした。この数字がどんなに高い数字かというと、例えば現在の日本では3.6/1,000ですから、その数十倍の確率で赤ちゃんが死んでしまうということです。ナイルの辺から見渡す限りサトウキビ畑が広がっているようなところで公共交通機関が整備されておらず、妊産婦がＭＣＨ(母子保健)／ＦＰ(家族計画)クリニック等の医療機関にアクセスすることが大変難しいのです。約６割の妊産婦が妊娠中に何のケアも検診も受けず、分娩の約８割がダヤと呼ばれ、近代医学の訓練を受けていない伝統的産婆の介助により自宅で行われます。異常が発見された場合には県病院へ送られます。私は病院を実際に見てきましたが、廊下から庭まで大量の外来患者で溢れていて、清潔・不潔の区別すら出来ないような状況下で毎日何十人もの出産や手術が行われていました。

また皆さんも馴染み深いと思います予防接種、三種混合ワクチンやポリオの生ワクチンはエジプトでも法律で接種が義務付けられているのですが、これも都市部の平均82％の接種率に対して上ナイル地方農村部では52％と非常に低い数字を示していました。

田舎に行くと実際とにかく子どもが多い。1988年の統計で０～14歳が全人口の40.1％を占め、学校では教室から生徒が溢れ授業は二部制。これは教室が足らないので朝のクラス、昼のクラス、午後のクラスと一つの学校を３倍利用するのですが、先生の数も足らず待遇も非常に悪いということでした。また、母乳栄養の知識が行き渡っておらず、特に免疫物質を多く含むといわれる初乳を「身体に悪い」と飲ませない習慣や、産後60日間は赤ちゃんを日光に当てない迷信なども見られました。夏には灼熱となる砂漠の国では太陽は

嫌われ者なんですね。

そのように多産多死、たくさん赤ちゃんが産まれながら一方でどんどん死んでしまう、お母さんや子どもの健康にとって非常に困難な状況がそこにはあったのです。

エジプト政府は1986年、当時の人口増加率がそのまま続くと21世紀初頭には1億人に達し、国の開発に大きな障害となることを予想し、人口増加率の引き下げと人口分布の適正化を掲げた「新人口政策」をスタートしました。その実現のため、農村地域に重点をおいた家族計画の普及、妊産婦と乳児の死亡率引き下げのための医療サービスの向上、農村部の開発による都市移住の抑制に取り組み、これらの実現のため日本政府に家族計画・母子保健分野での協力を要請しました。1989年12月にＪＩＣＡより家族計画・母子保健、ＩＥＣ（教育普及活動）、業務調整の３名の長期専門家が派遣され、プロジェクトが始まりました。

エジプト側のカウンターパート機関は国家人口審議会ＮＰＣ（National Population Council）です。ナガハマディにある巨大な国営企業アルミニウム精錬工場の協力を得、その中に事務所を設置し活動を始めました。

上ナイルは非常に保守的な土地柄で、女性たちの家族計画実施率は僅か７％前後（1990）でしたので、当方としてはいきなり家族計画を前面に打ち出すのではなく、今まで医療機関に接することが困難であった遠隔地域の住民に「妊娠中から検診を受けて、子どもが病気になったり死んだりしないように元気に育てよう」と移動検診を実施することで死産率や乳幼児死亡率を下げ、間接的に家族計画の促進を図る作戦で行こうという戦略を立てました。ＮＰＣはナガハマディをパイロットプロジェクトと位置付け、検診車による農村へのアプローチを全国に展開しようと考えていたのです。

プロジェクトの開始以来、対象地域の調査や、地域の母子保健の貴重な情報源であるダヤとの関係構築、検診活動に従事するアシスタント・ナースの養成などを行い、私がエジプトを訪れた91年１月に活動の中心となる産婦人科移動検診車が日本から到着しました。

これからご覧頂くビデオは私がこのプロジェクトでの最初の仕事として制作した、「移動検診車プロモーションビデオ」です。ＩＥＣ活動の目的は第一に村人全体を対象に検診車の機能

とその背後にある母子保健・家族計画の重要性を訴えること、第二に検診車における医師の指示の補足強化、また家族計画と母子保健の知識を普及する教材を提供することです。

この地域では家族計画は知っている(90%)ものの実行するものが少ない(7%)のが大きな問題でありました。IECによる普及では住民の知識(K)を増進するのみでなく、家族計画に対する人々の態度(A)をポジティヴに変容させ、実施(P)に踏み切らせる二段階がありますが、KAPの中のこの第二、二段階が焦点となっていたのです。

従ってこのビデオでは「プロジェクト活動の柱」である移動検診車に女性たちに先ず来て貰うこと、そのために決定権を持つ男性に働きかけ、妻たちを検診車に来させるために村で行う村の男性対象の検診車説明会でこのビデオを見せて、説明会を成功させることを最大の目的としました。

ビデオをメディアに選んだのは高い非識字率と共に、この地域でもほぼ全世帯にTVが行き渡っており、人々が現在知っている家族計画に関する知識も殆どTV放送を利用した全国レベルでのIEC活動から得られたなど、ビデオ教材の受け入れ度が高いことが分ったからです。

如何ですか。このビデオのファーストシーンは生まれたばかりの赤ちゃんが産声を上げているところです。『大事な子供を健康に産み育てるために検診車へ行こう!』というメッセージを象徴するものです。農村では子供の映像に対する好感度が非常に高いので、産声に健康で元気な子どものイメージを込めました。これを撮るために2日間早朝から病院に詰めなければなりませんでしたが…。

写真 1

ご覧のように(写真1:サトウキビ畑で撮影する平井) ナイル川の周囲にサトウキビ畑の広がるこの地域です。いま映っているのはプロジェクトサイトのア

ルミニウム工場にある家族計画クリニックで妊婦さんが超音波診断を受けているところです。しかし農村の人々はそこまで来ることが出来ない。そこで、ちょうどいまナレーションで言っていますが「その代わりに村には移動検診車が行く」という訳です。健康な妊娠、安全な出産、赤ちゃんの健康のためにこの車がある、ということを強調しているのです。続いて、車に乗り込む患者さんの視点で車内を紹介していますね。

実際の制作過程では、一旦編集したテープを事前に村長さんに見て貰いました。反応は「大変良い。しかし赤ちゃんと一緒に母親が写っているのを他の男たちに見せるのは良くない(妻を他所の男に見せるのは習慣に反する行為)」とのことで、それらの映像を赤ちゃんだけの映像に差し替え「男性用バージョン」を作成しました。これは村への検診車巡回を受け入れて貰うための村の男たちへの説明会で映写する、本来の目的のためのものです。一方、元のバージョンは「女性専用」として別途利用することにしました。

先ず、一般住民を対象とするＩＥＣ活動ではターゲットグループの置かれた状況を慎重に考慮しなければなりません。直接の対象が女性であっても、保守的な農村では「宗教者～村の指導者～男性たち～女性たち」という段階を追ったアプローチをとらなければ人びとに受け入れられません。即ち、宗教者や村長などの村のオピニオンリーダーをプロジェクトに積極的に involve し、彼らの賛同と影響力をもって一般の男性住民、つまり配偶者である女性が検診を受けるかどうかの決定権を持つ人々のプロジェクトに対する理解と受け入れの気持ちを促進します。そして然る後に初めて本来の対象集団である女性たちが検診車までやって来られるという訳です。

説明会を経て実際に検診車が走り始めてからも、例えば集まった女性たちに健診の順番をどう認識して貰い、どう呼び出すのか？初めは番号札を作ってみたが直ぐに紛失されてしまって失敗。呼び出しも本人(人妻)の名前を直接人前で呼ぶのはタブーで「○○夫人」と夫の名前で呼ばねばならない等、試行錯誤しながらの発見の連続でした。

幾つかの村を２台の検診車が定期的に巡回する体制が整ってからは、ビデオとモニターＴＶを搭載したＡＶバンで健診前日、当日に広報宣伝活動を行い、検診車によるサービス中には待合室で順番を待つ女性たちにビデオを上映し、母子保健・家族計画の知識の普及

を図りました（写真２：検診会場での教育活動）。

その後数々のパンフレット、教材カレンダーなども制作され、上ナイル農村でのプロジェクト活動は、ＩＥＣ分野でもパイロットとしての役割を果しました。

このような遠隔地の保健組織でビデオ教材を自作するのはエジプトで初めての試みで、その後の移動検診車活動地域の拡大に貢献しています。ＮＰＣ、ナガハマディ双方のカウンターパートが日本で研修を受け、両サイトに制作システムを強化する機材供与もなされ、カイロでは全国・テレビ放送レベルの制作と地方への技術指導を行い、ナガハマディではマスメディアで得た知識をさらに地元にブレークダウンした教材を制作する連携体制が整えられました。

しかし、このように遠隔地の機関が教材、特にビデオ教材を自作できるケースは、今までそんなに一般的ではありませんでした。途上国では資機材や人的資源が地方に配分され難い現実があったのです。とはいえビデオ編集機材が手軽で安価になった現在こそ、エジプトの経験が大いに生かせる時代なのです。

ともあれエジプトでは日本の協力期間終了後、自力での移動検診車の開発を始めました。ではエジプト政府の狙いであった家族計画の普及による人口増加率の引き下げはどうなったでしょうか。配布資料の2000年エジプトの統計を見てください。エジプトの人口増には幾分歯止めが掛かったように見え、乳児死亡率も下がっているようです。

写真 2

普段はアザーン（イスラムの祈りの呼びかけ）を流すエジプトの片田舎はモスクの尖塔のスピーカーから「検診車が来たから皆集まれ」とアナウンスが流れる…。私の心に刻み付けられたそんな不思議な光景がいつまでも続くことを、私は願って止まないのです。

〈司会者〉

どうも、ありがとうございました。続きまして、国際協力活動をしてこられた中で出会った問題点がございましたら、お話頂きたいと思います。

〈平井〉

先程はＪＩＣＡ専門家時代のエジプトの事例をお話しましたが、青年海外協力隊、皆さんにより身近なその協力隊員だったときには、特に苦労といったものを感じたことはありませんでした。毎日が楽しくて楽しくて仕様がなかったというとちょっと言い過ぎですが。私の場合、初めに申しましたように自分の赴任は相手側、受け入れ側、大学に忘れられているようなものでした。これは、相手側が要請を出してから自分が実際に配属されるまでのタイムラグのため、ある程度は仕方のないことなのですが、とにかく当座はやるべき仕事もないお客さん状態で、毎朝大学に行って出勤簿にサインして、上司である教授や部下の技術員と話をして帰ってくるという、まったく配属先で現地語の訓練をしているような状況でした。しかし、そうしながらじっくり状況を観察し、要するにここの人びとにとっては視聴覚、Audio Visualというもの自体が新しい技術で、日本から機械は貰ったもののそれで何が出来るのか、何をしたら良いのか分らないのだなということを見極めたのです。

自分の仕事は自分で作る。私は教授たちと交渉して、視聴覚技術が自分の配属先であるこのペラデニヤ大学工学部での教育でどのように利用することが出来、それが如何に効果的であるかをプロモーションする教職員向けセミナー開催の許可を得ました。

初めは多数派現地語であるシンハラ語はおろか大学での共通語である英語――スリ・ランカは多数派であるシンハラ人と少数派タミル人などの多民族国家なので大学では旧宗主国の英語が共通語で、高等教育は講義もテキストもほとんど英語です――その英語も

私の場合、当時はそんなに自在ではなかったので、講義の一から十まで、ジョークまで一言漏らさず原稿を作り、ＯＨＰやハンドアウトを作り上げ、セミナーに臨みました。このように初めは相当な労力だったのですが、セミナーをやったことがきっかけで、漸く何人かの先生方、教授方が関心を示してくれ、一緒になって様々な教材を開発するという本来の仕事が出来るようになったのです。

２年と１ヶ月の任期を終えて帰国する頃には、相手側の人びとは私の帰国直前の頃の良いイメージしか持ってませんから、その後来た後任隊員に対して「朗はあんなに英語が上手だった、シンハラ語もペラペラだったのに…」などと愚痴ったそうですが、私も最初は全然喋れなかったし仕事も出来なかったので、ただ皆それを忘れてしまってるんですね。まあそのように国際協力では実際に現地に行ってみて予期せぬ困難や異文化コミュニケーションの問題に遭遇することも多いけれど、そこを如何に早く克服して自分のいるべき位置、場所を見出すのかということが肝要なところでしょう。

私の場合自分の技術を移転する相手であるカウンターパートも、大学は新聞公募までして何とか任用しようとしてくれたのですが残念ながら最後まで見つからず、ノンアカデミックスタッフで部下という立場の技術員相手に対して技術を教えていました。ことほど左様に、実際の現場では協力隊の募集パンフレットに書いてあるように綺麗には、ことが進まない場合の方が多いのです。

そこで先程も申しましたように、異文化の中で自分で自分の位置を探す、コミュニケーション能力というものは決して英語が流暢に喋れるとかそんなことではなく、自分の中に日本語で堂々と語れる確固とした思想がある、人に伝えるべきモノ、これは必ずしも立派な技術ということでなくても、人としての拳線に響く高い志といったようなものがあるということが必要なんじゃないかと思います。

かといって協力隊はそんなに敷居が高いものではなく、身近なメリットもたくさんあります。例えば、休職参加以外で協力隊に行った場合、２年間の任期中に２百数十万円の積立金というものを協力隊事務局の方で自動的に積み立ててくれています。これは協力隊に参加するために退職して、アパートも引き払って任国へ赴任した。そんな隊員が帰国し

てくると、その日から住む家もない無職のプー・タロー・になってしまう、それに対する生活再建資金という意味でもあります。実際にはそれを利用してまた海外へ留学したり、あるいは国内で大学院に入ったりと、そういう人もとても多いし、非常にポジティブに協力隊とかボランティアを利用するということもそれは支えになると思うので、そのところをひとつ付け加えておきます。

それから私が思った問題点というのは、協力隊自体というのは私が自分から進んでいってやったことですのでそんなに苦労とか思えるようなこともないんですけれども、毎月のように職場の人間といっしょに近所の飲み屋みたいなところに行ってお酒を飲んでいたりしたわけなんですけれども、あるんですね庶民の飲み屋みたところが。そういうところで飲んでて、そしたら帰る前に急に同じ所で働いていたおじさんがなんか知らないけど酒に酔ったのか泣き出しちゃったんですよ。どうしたのかと思ったら私はあなたに言わなければならないことがあるのに言えなくて、もっと手伝いたかったのにエーン、エーンと泣いて、どうしたのかと思ったら後でわかったんですけれども、そのおっさんはですね、職場の機材を一部くすねて売り飛ばしてた。最後は泣きやがってこの野郎ふざけんじゃねえとまあそういうこともありますけども、まあでもその人はそのことがばれてもクビにはならず、他の部署に移動になっただけだったんです。

まあとにかくですねえ、どちらかというと協力隊での苦労というのは自分が好んですることだから、そうやってコミュニケーションというのが取れるようになってくれば必ずうまくいきます。現地の人との関係というのも協力隊のボランティアのベースがあればそんなに人間としての上とか下とかの関係もないわけですから、必ずコミュニケーションがとれるようになると思うんです。ひとつ問題なのは専門家とかそういう後々の問題にかかわってくるんです。問題が起こるとすれば日本人どうしの中での軋轢というかですね、結構これがばかにならない。特に外国に出ていると狭い日本人社会なのでそういう中でのは、やはりなんだかんだ、足の引っ張り合いとかいうのがあります。この人は一体何しに来たのかなという、そういう人間も数ある中にはやはりいるわけです。まあ体験する中で嫌なことというのがもしあるとすればですね、それは必ずしも隊員同士ということではなくて、

その現地の事務所の調整員というかコーディネーターといって隊員のお世話するような役の人がいるんですが、そういう人との人間関係がうまくいかないこともあるんです。隊員が集まって文句言ってるっていうのが、自分の職場の文句を言っている人も時にはいますけれども、だいたい日本人の中での文句というのが多かったような気がします。ましてそれがおっさん、おばさんの世界である専門家の世界になるともうほとんど90%それです。ですからそこは日本人社会であるということを認識して、それなりになんとかやるしかないだろうとまあそういうことです。取りあえずそういうことで終わります。

第三部　地域社会から学んだこと

〈司会〉

ありがとうございました。川添さんに聞きたいのですけども、今日の講演会とはあまり関係ないんですけれども、今のお仕事で寿町でお仕事をしているということでその事についてもお話を聞かせて頂けますか。

〈川添〉

今私は職場が寿生活館という所で生活相談の仕事をしています。仕事で例えば直接今外国の方とかと係わるということはほとんど少ないんですね。1980年代の半ばから日本の景気が良くなってバブルのころにはお隣の韓国からとか、後フィリピンとか、あとタイからも少し建設労働の方に働きに来る人がいました。でそういう方は日本各地にいらっしゃるんですが、特に寿町というのは簡易宿泊所というのがたくさんあるところでして、その日一日づつ宿泊ができます。そこに建築の仕事で来た人たちが泊っていました。その時ひとつ問題になっていたのが、生活費用の問題もあるんですが、そういった方たちが病気になったときにどうしたらいいかというのが大変な問題でして、その分の生活相談というのをやっていました。今は少なくなってきまして、中華街とかで働いていらっしゃる人たちの子供が保育園に行くとかといった時に、たとえば中国語でパンフレットをつくらなけれ

ばいけないとか、お父さんお母さんとコミュニケーションをとるのにどうしたらいいのかといった問題が今はあります。

〈司会〉

ありがとうございました。本日は国際協力に関心のある学生の方もたくさんいらっしゃっていると思いますので、学生に対してのアドバイスなどがありましたら教えて下さい。

〈林〉

協力隊とか日系社会青年ボランティアに興味ある方は受けてみるといいと思います。年齢は20歳からですけれども年齢に達していなくても、春と秋に募集の説明会を大々的にやってますのでそういうところにちょっと足を運んでみると、それなりに概要がつかめるのではないでしょうか。

協力隊がいいとか悪いとかというのは本当にその人次第ですし、行った先でも全然違うし、その人自身のとらえ方によっても全然違うのですけれども、私は終えてみて、今の仕事に就いて思うことは、職場内だけでなく、外に出て、○○実行委員会とか、○○運営委員会など、あちらこちらのそういう委員会に顔を出すことが多いのですが、そこで必ず協力隊のＯＢ／ＯＧに出会うということです。そのことによってさらにネットワークがひろがります。そしてもう１つは、「林さんはどこか行っていたの」とあたりまえのように聞かれることです。協力隊でなくても、なんでもいいのですが、そういう経験があるということが前提のように話が進んでいくなあと感じます。もしチャンスがあるなら行ってみると世界が広がるのではないかなと思います。

20歳以上、だからといって、大学生の身分で行くのはなかなか難しいのではないかと思います。なかなか合格しないと思います。学生さんで受かっている人は卒業見込みの人や大学院生だと思います。年令は39歳までなので、そんなに焦ることではないし、結構年上の方がいっぱいいますので、ゆっくり考えて行けるときに行ってみるといいんじゃない

かと思います。具体的に今何ができるかということなんですけども、何もＪＩＣＡではなくてもいろいろな事があります。例えば図書室にもいろいろな情報誌がありますが、よくいろいろな情報が載っているのは、国際協力ＮＧＯセンター（ＪＡＮＩＣ）というところが出している地球市民という冊子があります。これは会員にならないと手に入らないと思いますが、場合によっては図書館などに置いているケースもあるかと思います。そこでは例えばスタディーツアーの情報ですとか、ＮＧＯ団体のインターンの募集、アルバイトの募集、など国際協力関係の情報がけっこう載っています。他にもいろいろあります。私も仕事上でそういったインターンをやっている大学生に会うことも多く、学生でもできることは、結構多いんだなと思っています。

〈川添〉

特別外国に行ってなにかいろいろな事をするというよりは、僕のまわりなんかは見てきたいとか、そういった気持ちでやっています。あとは、本当に日本と特に変らないということです。一番ベースの所にある人間関係とかは変らないというふうに思います。もう一つ、少し長い目でつきあっていくという姿勢はとても大切です。行って合わない人もたくさんいるんですけれども、例えば私が行った所というのはこないだちょうど帰ってきてから数年してから行ったんですけども、これからも何年かおきぐらいには行ってみたいという気持ちが持てるところです。自分が住んでいたところの人達とはずっとつきあっていこうという永いものです。一生のあいだずっと関われるようなものができればいいのかなと思っています。

〈平井〉

さっきさんざん脅かすようなことを言っていて矛盾するんですけれども、協力隊などで特に言われているのは、もちろん技術協力というのが旗印にはなっているんですけれども、本音の部分では日本青年の教育ということがテーマなんだそうです。ですからみんな本当に遊びに行くんでは無いんだけれども、見聞を広げる、とそういう意味でですね。本当に

気にしないでどんどん実現したりですとか、挑んでいってほしいというふうに思います。

自分自身の今までの経験からしてもですね、途上国に行って偉そうに専門家と称してあれこれ指導などというような事をやっているんですけれども、実際には人に対して教えた事よりもそこの場所、それから相手の人達、いろんなそういうところから学んだことの方がずっと多いわけですね。ですから本当に、何も心配することは無い。ただ大事なことはコミュニケーション能力を身につけるということ。コミュニケーション能力というのはただ単に語学ができる、英語がしゃべれるということではないですね。いくら英語が一見流暢にしゃべれても、その中で日本語でちゃんと展開できる内容というものが無いような人間というのは絶対誰も評価してくれません。ですから日本語でちゃんと話が出来る、そういう知性というものを養っていけば、相手を思いやる心というものを養っていけば、どんな所に行ってもコミュニケーションをする能力というのは必ず持てると思います。それとあとは体力です。さっき川添さんが言ったようにどんな所でも寝られる、どんなもんでも食える、そういう病気にならない力というのを養っていく。そういうものがあればいいと思います。それでさっき林さんの方からアピックの話がありましたけれども、このアピックの国際協力プラザというのが南麻布にあるんですけれども、そこに行くのもいいと思いますし、取りあえずホームページがあります。www.apic.or.jp/plaza/ これで見て下さい。すごくいろいろな情報が手に入ると思います。

第四部　質疑応答

〈司会〉

ありがとうございました。それでは質疑応答に移りたいとおもいます。同じ学生ということでちょっとしたこともいい機会だとおもうので聞いてみて下さい。

〈質問Ａ〉

エジプトの母子健康活動のビデオ作成のところで、現地が女性に対して差別とか偏見が

ある地域だということをおっしゃっていたのですけれども、そのプロジェクトには女性の方も参加していたんですか。もし参加していた場合は何か不都合な点とかはありましたか。

〈平井〉

やはり基本的にプロジェクト対象が女性であるということが一点、それから専門家には産婦人科の知識が必要だということで、中心になっていたメンバーは女性の助産婦免許を持った看護婦の先生、それからあと私に対してこういうものを作れと指示をしていたＩＥＣの専門家、この人も女性の専門家でした。二人ともやはりそういう地域で生活するために、かなりいろいろな苦労があって、まず女が一人でそういうところに来て住んでいるということが彼らエジプト人の常識では計り知れないことなんです。しょうがないんで独身だとは言わず、本当は二人とも結婚していたんですけれども、旦那とは死に別れたというふうに嘘をついて、私は一人だけれども働かなければいけないんだということにしていました。心ならずも、それで何とか理解を得て働いていました。

〈司会〉

ありがとうございました

〈質問Ｂ〉

お三方はフェリスの大学院生ということなんですけれどもフェリスの大学院に入った理由というのを聞かせて頂ければと思います。

〈林〉

メキシコでの経験は日本語教師でしたけれども、人間関係というのがもとになっている国際交流ということだと思うんです。帰国後、働いているところが川崎市国際交流協会で、外国人、日本人、とにかくいろいろな方と会う。イベントやったり講座やったり、経験的に企画をするということというのは出来るのですが、そうではなくて、もう少しアカデミックに追求していきたいというのがありまして、勉強したいと思いました。

〈川添〉

数年前に確かここで大学に関するシンポジュウムというのがあったと思います。私それに申し込んだんですけれども、それに実際行けなかったんです。そうしましたらこちらのフェリスからこの赤い表紙の雑誌というか、冊子を送っていただいたというのがありました。それでここでそういう国際交流学部が出来たというのを知って、その後数年経って最近また、たまたま新聞で大学院が出来たというのを知りまして、それで資料を取り寄せようというので請求したところ、大学院の入試要項そのものを送っていただいたんですよ。それがあったんで、机の上に置きっぱなしでどうしようかなと思っていたんですが、折角送ってもらったんで、あとクリスマスの時にカードまで送っていただいたんですよ（笑い）。それでもしかしたらいい学校だなと思って、そういった事もありましたので。

〈平井〉

私の場合も林さんと同じように活動というのは経験的に積み重ねてきたんですけども、それをただそれで終わらせるのではなくて、もっと客観化、科学というようなアカデミックな方向に持っていく、もう少しまとめるとかあるいはそれを広げていく、客観的に他の人に伝えていくという、そういうふうな事が必要なんではないかなと思うようになったというのがまず最初の背景で、その次にあとこれはすごく実利的な事ですけれども専門家として活動していく上で特に日本でない外国でやる場合には、やはり修士であるとかあるいはＰｈＤであるとかという学位というものは無いよりあった方がいい。というより、ある方が非常にいい、望ましい、まあほとんど必須というような状態であるということで、まあ自分もということがもう一つの点ですね。それで自分の場合は、実は別の大学院も受けたんですけれども、残念ながらそこはだめで、困ったなと思っていたときにたまたまＮＨＫのラジオを聴いていたらニュースでフェリスが今度男も入れることになったということで、大学院の国際交流研究科だけですけれども、これもなんか神様の引き合わせじゃないかと思って、それで早速インターネットでホームページを調べたという、そういうことです。

〈質問Ｃ（留学生）〉

林さんもメキシコでボランティアをなさって苦労したというのを聞きまして私も初めて日本に来た時の苦労を思い出しました。今までボランティアをなさっていて一番勉強になったことというのを聞かせて頂ければと思います。

〈林〉

一番勉強になったとところというのは、たぶん文化の違いということが、どういうものかということに触れられたことだと思います。まだまだ本当の所はわかっていない、わかるなんていうことは恐れ多いことなんだと思いますが、例えば授業で南北問題の情報を与えられて、もちろん理解できるんですが、それをより簡単に理解できていると思うのは、体験したりそこでいろいろなものを見たり、メキシコも私がいた学校は大変キレイな学校ですけどもまったく世界が違うところもたくさんあるので、そういうのを見ていたおけげで、考え方の幅を広げてくれたというか、問題点がわかりやすくなったと思います。文化の違いに触れたという、良いとか、悪いとかというより、こういう全然違う考え方もあるんだということを、身をもって体験したということかなと思います。

さっき平井さんがおっしゃたんですがＪＩＣＡの派遣の目的として青少年を育成するという目的もあるということがあったと思うんですけども、まさに育成されたのは私だと思います。出発の段階では国際協力ということはあまり考えておりませんでしたし、もちろん興味はありましたけども、それ程真剣に考えていた訳ではありませんでした。けれどもその３年間の文化の違いだとかいろいろなものを見ていくうちに、日本に帰ってきてなにかそういう考え方、たとえば差別というのを無くしたりということに繋げていきたいというような、そういう考えになったのはＪＩＣＡの経験があったからです。

〈司会〉

最後に、今日、講演会の初めに海外で生活してみたい人と皆さんに聞いたんですけどけっこう多くいらっしゃいましたよね。それで今日の講演を聞いて、それでもやっぱり行

きたいなという人が増えたら嬉しいなとおもって皆さんに聞いてみたいと思うんですけども。

将来何らかの形で海外に行って住んでみたいと思っている方はどれくらいいらっしゃいますでしょうか。挙手をお願いします。ああ嬉しいですね、沢山いらっしゃいます。ありがとうございました。

では今日はありがとうございました。これをもちまして講演会を終了します。お疲れさまでした。

グローカル ―― 創刊号 ――

2002年3月15日　発行

発行者　山之内　靖

発行所　横浜市泉区緑園4－5－3
フェリス女学院大学大学院
国際交流研究科
電話 045-812-8283

印刷所　㈲ カワダ企画
電話 045-712-2785